遊戯王　～四霊使いは可愛い娘～

LEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　～四霊使いは可愛い娘～

【Ｎコード】
Ｎ１０１５Ｚ

【作者名】
ＬＥＮ

【あらすじ】
遊戯王の二次創作です！最近またやり始めたら書きたくなって書き始めました
主人公、高島蓮哉は転生者。中学三年という中途半端な時期に転生した彼はデュエルアカデミアに通うことになり……？。
シンクロエクシーズはバンバン使います、主に主人公が。チートドローとかはどうなるか分かりませんが、アニメ効果のカードなんかは使う予定でいます。良ければ読んでいって下さい。よろしくお願いします

プロローグその１（前書き）

タイトルに関してはノーコメで。後々出てきます

……色々あって書き始める事になりました。よろしくお願いします

プロローグその1

上も下も右も左もないただ真っ白な世界。

目を覚ますと、なぜか俺はそこに立っていた。……というか凄いな俺、立ったまま寝てるなんて。支えも無しにだぞ？

えーと、確か俺は……、いつもの様に塾へ行く前にゲーセンによって初〇ミ〇のアーケードをやって……、それで……

『目が覚めたみたいですね』

———今の誰？、というか本当に此処はどこなんだ？。正直怖いな、俺の精神の中とかふざけて厨二ぶってる場合じゃないのは確かだし。

『……あ、そういえば姿を見せていませんでしたね』

また同じ声が響く。すると突然俺の目の前に何やら白い布を身に纏い、後ろにどでかい翼を生やした男性とも女性ともいえるような中性的な顔立ちの人が現れた

……ん？、翼？

「うおっ！？」

『いきなり姿を現してすみませんね。ただどうしても姿を現さないと話が進みそうにないので。私はモートと言います、以後お見知りおきを』

そういって頭を下げる……モートさん。ってモート？……モートってもしかすると

「あの……ひょっとして俺、死んだんですか？」

『っ！、……よく気が付きましたね』

「いや、モートって言うとウガリット神話の炎と死と乾季の神の事かなと、思いまして……。」

『勤勉ですね、あなたの世界に合わせてウガリット神話のモートという名前を持ってきましたが知っているとは思いませんでした』

そう言ってくすりと笑うモートさん。

いや、ただペル〇ナで興味持っただけだからね？あれ、色々なとこからネタを引っ張ってくるし。……そういや、デ〇サバＯＣが海外

でも発売されたって聞いたけど、信仰者から見たら喧嘩売ってるとしか思われないんじゃないか？

『正確にはまだあなたは死んでいません。意識不明の重体と言ったところでしょうか』

「意識不明の重体？。俺何かやらかしましたっけ？」

『……ショックで覚えていないのですね。いいですか？。あなたは塾と呼ばれるところへ行く前、ゲームセンターと呼ばれるところにいきました』

うんうん、言い回しがだるいがそれは覚えている。何せ初めてサ〇ハテのＥＸＴＲＥＭＥでパフェが取れたんだし。
塾へ行った記憶がないとすると……、ゲーセンから塾へ行く途中？

『あなたは横断歩道を歩いている途中、横から来るある異変に気が付きました』

横断歩道……、横からの異変……、――――っ！？

『あなたは安全なところにいましたが……まだ幼き子供がそれに気づいていないのに察知しました。……後はもう、お分かりですよね？』

「そうだ、…俺は、走ってあの子を抱きかかえて……っ！、そうだ、あの子はっ！？」

『優しいお方なのですね。安心してください、あの子は多少の擦り傷ですみましたよ。ですがあなたは……』

「それで俺はここにいるんですね。気になってたことが分かってすっきりしました。ありがとうございます。死んではいないんですよね？」

俺のその言葉に苦虫を踏み潰したような顔になるモートさん。
なんだ、まだ何かあるのか？

『実は…ここにいるあなたは、あなた自身の魂なんです。普段なら此処へ飛ばされてもすぐにその所有者の体に戻すのですが……何故か反射して体にあなたを入れる事ができないんです。……まるで、あの世界に戻りたくない。そんな感情が強いのか』

「……」

『自覚があるのですね？。ですが、ここまで強く重い感情を解くとなるとあなたの世界にあわせて約１２０年から１４０年。身体の方が持ちません』

……あながちモートさんの言う事は間違ってない。

俺は中学校でも塾でも交友関係が上手くいかず、出来た友達もいつ

嫌われるか不安で仕方がなかった。
こんな口調な癖にトレカやボ〇ロが好きで、話が出来るやつなんて本の数人だった
地味にＤＱＮも多かったしな。俺には合わなかった

『……そんな貴方にまだ希望があるとしたら？』

「希望？、そんなものがあるならそんな気持ちにはなってませんよ。何ですか？、どこか別の世界に転生させてくれるとでも言うのですか？」

『その通りですよ、貴方には転生してもらいます』

「っ！？、……マジで？」

『大マジです』

やべぇ、ちょっと普段の口調が出てきていけないと思ったら寧ろノッてくれた。
さてとこういうパターンだと、どこか決めさせてくれるよな。とある…バカテス…ＩＳ…
そう言われると色々出てくるな。

『と言っても行く場所はこちらが決めます。何しろ空きがそこにしかないのですから』

「あっ、そうなんですか……まあそう簡単に人生は上手くいきませ

んしね」

『……とりあえず、高島蓮哉。……こっちに来なさい』

へっ?、今、俺の名前が呼ばれた?。あっ、自己紹介してなかったな、俺の名前は高島蓮哉だ。よろしく

モートさんからは雰囲気がさっきと違ってかなり怒ってそうで怖いイメージを感じられる。さらに言えばモートさんは俺じゃない反対側のほうに向かってそう言ってる。

……すると、奥から俺に似た同い年ぐらいの奴が現れた……

プロローグその１（後書き）

もう一話プロローグを書く予定でいます

プロローグその2

『……こんな事もあるんですね』

「こっちのほうが驚きましたよ、って事はこいつがその世界の俺って事でいいんですか？」

「お前、俺に向かって指を刺すな。」

……説明しよう。先ほどモートがつれてきたのは、俺が転生する先の世界で生きていた俺。
モートは俺の名前を知らなかったみたいでその事を話してみると、目を丸くして驚いた。

『考え方はそれで構いません、ですが……、平行世界で考えてもこの確率は１／無量大数以上。
運命と言うのはこの事を言うのでしょうか』

「多分そうなんだと思います。……だって目の前にいる蓮哉？は見た事がないはずなのに、一緒の時間を共に歩いてきたような感じがしますから」

「気持ち悪い言い方すんな。だがまぁ、……こればっかはそれに感謝しねぇとな。あのつまらねぇ世界やあのマジック＆ａｍｐ；ウィザーズとも離れられるわけだからな」

……?、今何ていった?、……マジック&ウィザーズ?。これはもしや……

「モートさん、もしかして俺が行く世界って俺たちでいう遊戯王の世界ですか?」

『そういえば言っていませんでしたね。はい、貴方の行く世界は遊戯王、時代系列で考えるとGXのところですね』

何で俺死んでからこんなに付いてるの?、最近やり始めたばっかじゃん。開闢の禁止が解除+トリシュが当たる+レダメ採録で興奮しきってた俺には素晴らしい事だよ?……元の世界に未練がないわけでもないけど

「さっきから言ってる遊戯王ってのは何だ?」

『貴方の世界で言うマジック&ウィザーズですよ。最もさらに色々な事が成されていますがね』

「冗談じゃねぇ!、何で俺がまたそれのある世界に行かなくちゃならないんだ。雑魚ばっかで話にならねぇ」

話を聞く限りだと、こいつはデュエルも出来て実際かなりの実力者らしい。……だが、

「お前、デュエル出来るのか？。と言うか、その世界で粋がってる様じゃあこっちの世界じゃすぐ負けるぜ？」

「ああ？、俺が負けるとでも。調子に乗ってんじゃねえぞ。」

「なら遊戯王らしく、デュエルで決着つけようぜ。俺が勝ったら、転生はこのまま行う。俺が負けたらお前の好きにしろ」

「いいぜっ！受けてやるっ！」

やっぱりあの世界ではデュエルですべてが決まるらしい。……周りじゃそんな強くないけど大丈夫かな？

ここでモートさんが大きくため息をつく、どうしたんだろうか？

『……意気込むのは勝手ですが、今デッキとかは持っているのですか？』

「「あ……」」

『しょうがありませんね』

モートさんが何処からか杖を持ってきて振ると、俺と蓮哉の腕にデュエルディスクが装着されデッキも刺さっている。すげぇ、さすが神様！

『刺さっているデッキは貴方方の使っていたデッキです。好きに使ってください』

「モートさん感謝します」

「この場においてだけは感謝してやる……行くぞ、」

「「決闘(デュエル)!!」」

高島　蓮哉（Ｙ）　ＬＰ：４０００
ＶＳ
高島　蓮哉（Ｍ）　ＬＰ：４０００

「俺のターンからだ!、ドロー!。俺は豊穣のアルテミスを守備表示で召喚!」

豊穣のアルテミス　効果／光属性／天使族／攻１６００／守１７００

そういって、場に出てくるアルテミス。……すげぇ、これがソリッドビジョンか……ってアルテミス!?

「お前そのデッキ、まさかとは思うが……エンジェル・パーミッションか！？」

「良く分かったな。俺はカードを三枚セットしてターンエンドだ」

蓮哉（Ｍ）　ＬＰ４０００

フィールド

モンスターゾーン

豊穣のアルテミス　効果／光属性／天使族／攻１６００／守１７００

魔法トラップゾーン

伏せカード×３

手札　６枚→２枚

「厄介なデッキだ。俺のターン、ドロー！」

「その瞬間、俺は強烈な叩き落としを発動！、ドローしたカードを捨てろ！さらにアルテミスの効果でワンドロー！」

「くっ、やっぱり伏せてあったか」

だが今のカードにはあまり関係ない。なぜなら……

「俺は手札から魔法カード、地割れを発動しアルテミスを破壊！」

「させねえよ、マジックジャマーを発動。手札を捨てて地割れを無効。さらにアルテミスの効果でドロー。」

「なら、地砕きを発動！。アルテミスを破壊！」

空から物凄いでかさの拳が降ってきてアルテミスに直撃する。……これ、ロック〇ン・ＥＸＥのジャスティス・ワンじゃねえのか？

「ちっ、しょうがねえ」

「これで邪魔なドローソースが消えた。俺は手札からマシンナーズ・ギアフレームを召喚する。ギアフレームの効果！、デッキからマシンナーズと付いたカードを一枚手札に加える！。俺はマシンナーズ・フォートレスを選択して手札に加える！」

「っ！？、俺は天罰を発動！、手札を一枚捨て、効果モンスターの効果を無効にし破壊する。残念だったな、キーカードを手札に加えられなくて。（……にしても、今のカードは何だ？マシンナーズはソルジャー、スナイパー、デェフェンダー、フォースの四枚しかなかったはずだ。見た事ねえカード……おもしれぇ）」

天罰には予想が付いていた、もしくは攻撃の無力化。……伏せカードは無くなった。ならば俺の勝ちだ！

「俺は墓地のマシンナーズ・フォートレスの効果発動！、手札の機械族モンスターをレベルの合計が８以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。手札のマシンナーズ・カノンを墓地に捨てる事によってマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚！」

マシンナーズ・フォートレス　効果／地属性／機械族／攻２５００／守１６００

「はぁ！？なんだそのカード、攻撃力２５００の割に特殊召喚条件が軽すぎるだろ！」

「同感、マシンナーズフォートレスでダイレクトアタック！、更に手札から速攻魔法、リミッター解除を発動！。フィールドにいる機械族すべての攻撃力を倍にする！、これで終わりだ！」

「うあああああ！！」

高島　蓮哉（Ｍ）
ＬＰ　４０００－５０００＝－１０００

死んでからの初めてのデュエルは俺の勝利に終わった……

「それじゃあ俺が勝ったから転生はさせてもらうぞ」

「好きにしろ！、……俺も、お前の使っていたカードに興味を持った。また始めてみるか」

「俺より強い奴なんて向こうじゃ山ほどいたがな、それとこっちではこれは一種の遊びだからやり過ぎてると周りに引かれるぞ。」

「そうなのか、」

……これが昨日の敵は今日の友と言う奴だろうか？。といってもこいつは俺自身であって敵ではないがな

『……そろそろ、転生しますがよろしいでしょうか？』

「あ、そうだ。転生するのなら、頼みたい事があるんですが……」

『頼みたい事？、何でも言ってください。こっちの蓮哉がいなくなる切欠が出来たのはあなたのおかげですので』

「ありがとうございます。それじゃあ———」

俺の頼み事はスルーの方向で。というか、遊戯王に転生ならしてもらう事は一つだろ。
といっても俺は二つ頼んでしまったがな

「……じゃあな、俺。そっちでヘマするなよ」

「こっちの台詞だ。……あいつを泣かせるんじゃねえぞ」

「あいつ？、誰のこ――」

『それでは転生を開始します。』

俺の台詞はモートさんの声にかき消された。

ちなみに、モートさんが言っていたあっちの蓮哉がいなくなると言うのは、あいつはずっと前からあそこにいて人間に戻せるときを待っていたらしい。

しばらくしていると体が軽くなっていくのを感じる、流れに身を任せるだけで先に進んでいるのがわかる。
そして、行く先には輝かしき光が。――――これが転生。

「――ん、ふぁあっと。ここは何処だ？」

目を覚ますとそこは一部屋の病室、どうやら目を覚まさないままずっと入院していたようだ。

何やら足の辺りが重たい、俺は上半身を起こして確認する。……そこには、俺と同じぐらいの少女が疲れているのか、座ったまま眠っていた

「……Ｚｚｚ、はっ。もう朝っ！？――――へっ？」

「痛っ！？、いきなりに何し――」

それ以上は声に出せなかった。
なぜならそいつは……目に涙を堪えてこっちを見つめてきていたからだ。こういうのは苦手だ

見つめあう事数秒、急にそいつは俺に抱きついてきた。

……うおっ！？、何だこの状況！どうしたらいいのかわからねぇ

「……し、心配かけさせないでよ。死んじゃったらとかずっと……。う、うわあああん！」

……本当に何をして良いのか分からない、俺の胸の中でなき続けていて心臓がバクバク鳴ってる

あの野郎、何がつまらないだ。こんな完全にフラグのたってるような奴がいて。

リア充は爆発しろっ！

プロローグその2（後書き）

プロローグはこれで終わりです。結局デュエルしちゃいました

次回は早速アカデミアの入学デュエルに入ろうと思います。

霊使いもやっと登場します

読んでくださってまことにありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1015z/

遊戯王　～四霊使いは可愛い娘～

2011年12月3日23時54分発行